
コトリのウミ

陽日ユカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コトリのウミ

【Nコード】

N1568L

【作者名】

陽日ユカ

【あらすじ】

碧海大学医学部附属病院消化器官医局・医局長西海往は雨の中倒れている少女を発見。
すぐさま救急車で病院附属救命救急センターに搬送するが…実は少女は。

第1羽 コトりのデアイ（前書き）

医療関係が少々はいつています。誤字・脱字・訂正箇所などありま
したらお教えください。
よろしくお願いします。

第1羽 コトリのデアイ

俺は砂浜からウミ海へ向かって白百合の花束を投げた。

それは小雨の雫に濡れて、風に散った。しばらく荒れ気味の海をみつめた。

海を振り返らずに帰路へつく。

背後で浜木綿はなゆづりの花が風に揺られている。

海に面してる小高い丘の上にある家まで歩いてる。視線は雨が跳ねる灰色コンクリートの地面。

そうしていたら…視界に青白い手がうつった。視界を手から腕、肩、頭へと滑らせると…少女が小雨にうたれて倒れていた。

手首で脈を計る。…微かにしか触れない。計りにくい。

俺はスーツの胸ポケットから携帯をとって、すぐに救急車を呼んだ。それから、救急車に乗り救命救急センターが併設されている碧海大へきかい学医学部附属病院へ。

俺はセンターへ入るなり更衣室へ入り、紺色のスクラブに黒のズボンに着替え、白衣とPHSを身に着けた。

その間に俺が運んだ少女の情報が救命医たちに伝達されたいらしい。

皆、忙しく動き回っている。

そんななか、楽しげな声が背後から俺に話しかけてきた。

「なんだ。西海にしうみか。今日はセンターも休むはずだったろ？なんで居るんだ。」

俺は視線を処置台にいる例の少女に向けつつ答えた。

「ええ。そのつもりでしたよ、東宮先生とうきゅう。だけど、雨の中倒れてましたし、脈も微かでしたからね。」

「そうか。まあ…ただでさえ休日ひつひをセンターで丸潰しにしてんのに、

折角の日にも出勤か。ご苦勞なことだな。」

今、俺が会話しているのは…

碧海大学医学部附属病院救命救急センター・センター長とうぐうかなや東宮哉弥。

「まあ…俺らが出なくてもいいだろ。あれはきつと脳貧血か鉄欠乏性貧血じゃないか？」

「でしようね。」

実を言えば俺もそう思っていた。

「アホ。んじゃ救急車とかで運ぶな。此処は軽い患者を受け入れる場所じゃない。」

「はあ。すみません。そういえば今、満床でしたね。」

東宮先生は俺を横目で思い切り睨んできた。

「処置が終わったからお前んとこに入れるよ。今、満床で此処もベッドコントロール考えてんだからよ。」

俺が軽くコツクリ頷いた。東宮先生は満足したようで処置の様子をみている。

それから、ふと思い出したように

「おい、西海。今運んできた患者の身元、特定できるものあるのか？」

「はい。一応はね。本革アンティーク調トランクが荷物らしいです。ちゃんとしないとうちの医局の看護師長が五月蠅いですからね。

チエックしてますよ。」

それを聞くと喉の奥でクツクツと笑いながら東宮先生は俺を見て言う。

「ああ。消化器官外科医局・医局長も意外とダメだな。」と。そう、申し遅れたが。

俺は

碧海大学医学部附属病院消化器官外科医局・医局長・兼・臨時救命医にしうみわた西海往。

そんな話をしていたら、救命医の1人が俺達のもとへ来た。

「東宮先生、西海先生。患者の処置終わりました。脳貧血だったみたいです。」

東宮先生はやはり、という顔をした。そして報告し終えた救命医に「あいよ。んじゃ西海と一緒に今の患者を消化器官外科にベッド移してくれ。」

あと30分もしないうちに目が覚めるだろう。一通り検査したが疾患も何もでないしな。」

そう東宮先生が言えば、救命医は「わかりました。今から消化器官外科に移します。」と言って移送の準備を始めた。

「ああ…西海。お前はわかってると思うが、患者は失神したんだ。何か疾患の兆候があつたら検査させるよ。いいな?」

そういって、東宮先生は俺を鋭い目でじっと見つめてくる。

「わかつてますよ。患者が起きたら簡単な問診をします。」

その返答に満足したのか、「じゃあな。」と後ろ手で手を振り、去っていく。

俺は今少女の眠るベッドサイドの椅子に座っている。

患者の少女は静かにゆっくりと寝息をしている。

そんな彼女の本革のトランクを開けるが少しの衣装しかなく身分証明書など見つからない。

マズイ。いくら医局長は俺でもさすがにマズイ。

救命の治療を受け、いきなり専門外病棟のベッドに移送したなんて…師長に知られたら間違いなく説教だけでは済まない。反省文か何か書かされるだろう。

最悪だ。ここは俺の領域だ。テリトリー軽い職権乱用で見逃して欲しい。

そんな下らないこと考えていたら…

少女の目が開いた。俺を見つめてくる。

俺はできるだけ混乱させないよう優しく言った。

「此処は病院です。雨の中、倒れていたなので搬送して治療をしました。

もう動いても大丈夫でしょうが、簡単な問診をさせて欲しいのです。構いませんか？」

少女はちゃんと聞いていたらしく、小さく頷いた。

「はい。」

俺は問診表を彼女に手渡し、書かせる。

少女は問診表に記入していく。

名前は幸野ゆきのことり。

第1羽 コトリのデアイ（後書き）

最後まで有難うございます。

医療関係が少々はいつています。誤字・脱字・訂正箇所などありま
したらお教えください。

よろしく願います。

第2羽 コトリのキオク（前書き）

医療関係が少々はいつています。誤字・脱字・訂正箇所などありません。ありがとうございました。

第2羽 コトリのキオク

目を覚ました少女・幸野ゆきのことりは問診表を記入したようで、俺に

「あの…問診表書き終わりましたよ。」

と、少々怯えをちらつかせながら言った。

「ああ。はい、わかりました。」

俺はその場で問診表の回答をチェックする。

何らかの疾患の兆候は見られない。東宮先生の言うとおり、ただの貧血だ。

しかし、最後の問診「上記の問診以外で不調な点または気になる身体の症状」で…

俺はその回答について声を出して読んでしまった。

「『今までの記憶が失い。』」

回答を読まれた本人は困惑した表情で俺を見つめていた。

どういうことだ。これはようするに倒れるまでの記憶が失い。と、解釈すればいいのか。

因みにセンターでの検査結果には全身・脳ともに異常なし。と記述されている。

「本当にですか？」

「はい。」

しつかり受け答えできる。

普通、記憶が無いなら何らかのパニック症状が起きてもおかしくない。それなのに彼女は普通だ。

俺は彼女の様子を伺いつつ聞いた。

「名前は？」

「幸野ことりです。」

「住所は？」

「……………あ、えっと…無いです。」

名前は言う。しかし住所は『無い』

当たり前だ。記憶が失いのだから住所も『無い』。

しょうがない。彼女の記憶がどの程度あるか確かめるだけだ。

「わかりました。記憶が失くなる、ということは滅多な事ではありませんから。」

では、何か憶えていることとかありませんか？何でも些細なもので構いませんから。」

少女はしばらく考えてから…

「家事のやり方とか…お花の名前に、花言葉…そういうことなら憶えています。」

俺は驚いた。家事はともかく、残り全部は俺からすれば雑学に等しいものだ。

「そうですね、わかりました。」

では少しの間ここで服を着替えて荷物をまとめておいてください。」

俺は急いで別棟にある救命救急センターに向かった。

俺は東宮先生を見つけた。

「東宮先生！」

東宮先生は物憂げに振り向いた。

「なんだ西海？」

そして俺は伝えた。

「例の貧血の患者、実は記憶が失いんです。」

そして顎に手を当て考えてる。そしてある疑問を口にした。

「しかし…検査では脳には異常はなかった。…と、いうことは精神的には問題だな？」

「そのようです。」俺は頷いた。正直、それが1番有力だ。

「だから、彼女…帰る家も無いんですよ。どうしましょう？」

東宮先生はアホを見るような目で俺を見たそして

「アホ。お前は極度のアホか。そんなの西海、お前が面倒見るよ。」

いいじゃねえか。お前独身だし、家に帰ってやれるんだしよ。お

前があの患者と同居しろ。」

俺は目を見開いた。どうやら俺は貧乏クジを引かされるらしい。

「何言ってるんですか！患者は仮にも女性だし、まだ年端のいかな
い少女ですよ！」

そう言つと、東宮先生はニヤリといやらしく微笑んだ。

「だからお前が保護してやれ。野宿なんてさせてみる？」

碧海市周辺は治安が悪いからなあ、

あの患者はヤラシイ野郎共の良い餌食になるぜ？そしたらお前が
呪われるかもな？」

この人はそう脅して無邪気に笑ってる。

しかし、この人の言つとおりなのだ。

碧海病院のある碧海市は治安が悪く、院内の看護師も被害を受けて
いる。

そして、高速道路が沿岸にあるため交通事故が絶えない。そんな地
域なのだ、此処は。

そんな治安のせいで救命救急センターはいつもパンク寸前。

しかし、その状況をいつも絶妙なベッドコントロールで回避するの
が、

30代後半という若さでセンター長に就任した東宮哉弥。今日の前
で俺を「アホ」と連呼する人。

彼のベッドコントロール技術は本当に神業で誰にも真似は出来はし
ない。

まあ、そのベッドコントロールの被害を受けるのは一般病棟やら近
所の総合病院だ。

東宮先生は悶々と考えていた俺の思考を現実に戻した。

「おい、西海。で、どうすんだよ？」

俺は大きくわざとらしく溜め息をついて言葉を紡いだ。

「わかりました。俺が患者を保護すれば、すべて丸く収まるわけ
すね？」

発案者は意地悪く微笑^{わら}った。「そうだ。もう今日は帰れ、アホ海。」
と言って去っていった。
去っていく東宮先生の背中を見届けてから俺は幸野ことりの待つ部
屋へ戻った。

俺はノックをした。中から「はい。」という返事が聞こえたので入
室した。

「どうもお待たせしてすみません。」

退院手続きをしてきました。それと、今から私の言うことを真剣
に聞いてください。」

病院の患者服から真っ白なワンピースに着替え、白い鍔の広い帽子
を被っている。

何とも清楚でどこかのお嬢さん。という感じだ。

西海はそんな彼女を見て

「あなたは記憶を失くしています。」

その上、この地域は治安状況があまり良いとはいえません。

そこで、今救命医の先生とお話して当面の間は私があなたの身柄
を保護します。」

彼女は俯いてしまった。

さすがにこんなことをいきなり言われたら誰だって困惑する。

正直俺だって抵抗がないわけじゃない。しかし自分が診た患者だ。
最後まで責任をとりたい。

すると、俯いていた彼女は勢いよく顔を上げた。

そして、俺を見上げた。大きな瞳に俺を映して

「わかりました。これからよろしく願います！」

そう言って、今度は勢いよく頭を下げた。頭から帽子が落ちた。

帽子の中にあつた彼女の髪は少し明るめのマロンブラウンだった。

「はい。これからお願いします。」

俺も幸野ことりに挨拶をした。

そしたら彼女が顔を上げて、俺をしばらく見つめて。目線が合うと目を細め、花が綻ぶように微笑んだ。

第2羽 コトリのキオク（後書き）

最後まで有難うございます。

医療関係が少々はいつています。誤字・脱字・訂正箇所などありま
したらお教えください。
よろしく願います。

第3羽 コトリのアサ(前書き)

医療関係が少々はいつています。誤字・脱字・訂正箇所などありません。ありがとうございました。

第3羽 コトリのアサ

西海はパンがこんがり狐色に焼ける匂いで目が覚めた。

ベッドのサイドテーブル上にあるアンティーク時計を見ると、時刻はちょうど7時。

彼は目を見開いて起きた。いつもなら身支度も済んで、あとは出勤するだけになってる。完璧な寝坊だ。

カーテンを開け、日光を部屋に入れ、着替える。

白地に水色ストライプのシャツ。紺地に白チェックのネクタイ。黒のダブルスーツに同色のハット。

まさにその格好は英国紳士。彼は背丈が高いので、尚それに見える。急いで、1階のダイニングルームへ降りる。

西海はダイニングルームへ入り、テーブルを見た。

そこには、サラダ、ベーコンエッグ、焼きたてトースト、フルーツがたっぷり入っているヨーグルト。

それから西海お気に入りのだージリンがティーカップに注がれてあった。

彼がテーブルの賑やかさに呆然としてしていると、対面式のキッチンから声をかけられた。

「おはようございます、西海さん。」

西海がそちらを見れば、同居人・幸野ゆきのことりがいた。

西海は状況を飲み込めない頭をフル回転させながらも

「ああ…おはようございます、幸野さん。」

と、お互い挨拶を交わした。

彼女からは「はい！」と元気良い声と笑顔が返ってきた。

そして、西海は状況を理解しつつある頭である疑問を投げかけた。

「この朝食は全て幸野さんが作ったのですか？」

すると、ことりは少し照れくさそうに、しかし罰悪そうに「はい。」

と応えた。

「あの…すみませんでした。私は居候の身なのに勝手に色々使ってしまった…」

ことりのしゅん、としょげる様子を見て西海は苦笑して言った。

「いいえ。別に構いません。」

ただ…私は1人暮らしですから、こんな立派な朝食があったのに驚いてるんです。

さあ…座りましょう。せっかくの幸野さんお手製の朝食が冷めてしまいますから。」

そして、席に着いた。一言付け加えて「美味しそうです。」と、ことりに言った。

それを聞いたことりは嬉しそうに笑みを絶やさず西海の真向かいに座る。

そう、彼は『朝食無し』という生活が習慣になりつつある。

30代半ば、独身、忙しい職業柄、必然とそうなってしまう。

そんなことを考えていると、ことりが

「それじゃあ、これから食事や家事はいくつか私に任せてくださいませんか？」

と、ことりが申し出てきた。

危うく西海は飲んでいた紅茶を噴き出すところだった。

そして西海は朝食を食べつつもことりを観察する。

当の本人であることりは続けていった。

「私は居候の身です。タダで西海さんと生活するなんて無理です。」

…でも私は『家無き子』状態です。自分の家に帰ることもできません。

…だから、少しでも此処で生活する間は西海さんのお役に立ちたいのです！」

とても力説され、西海は圧倒されてしまった。

「でも、悪いですよ、それは。女性をこき使うわけにはいきません。」

「

西海は格好だけではなく中身も紳士らしい。

しかし、ことりも引かない。

「いいえ！お助けして頂いた上に、家に身を置かせて頂いています。

…だから、私の出来る範囲で家事とかをやらして欲しいのです。

…ダメでしょうか？」

ことりはまたしゅん、としよげた。

それをみた西海は小さな小さな溜め息をついた。自分が折れるしかない、と思ったのだ。

「わかりました。お任せします。

ただし、私の洗濯物は私がやります。それだけは譲れません。」

ことりはそれを聞いて、ぱあ、と顔を明るくさせた。

それから…

「はい！幸野ことり。西海家の家事を精一杯やらせて頂きます！」
と、元気良い返事を返した。

西海は「よろしくお願いします。」と、小さく微笑みを浮かべた。

朝食を食べ終え、出勤することにした。

そして玄関で革靴を履き、ことりにメモを渡した。

ことりはそれを受け取り「何ですか？」と聞く。

「それは私の連絡先です。携帯番号と…

碧海病院の一般外科医局の番号と救命センターの番号です。

『西海往ゆきに用事があります。』

と、いえば取り次いでくれると思います。

何かあったら連絡してください。すぐに戻ってきますから。」

ことりは「わかりました。」と、頷いた。

西海は靴箱に立て掛けて置いて置いた黒の革靴をとり、「行ってきます。」
と言っ。

するとことりが「いつてらっしゃいます。」と笑顔で答えてくれた。

こうして、西海往と幸野ことりの不思議な同居生活はスタートし始

めた。

第3羽 コトリのアサ（後書き）

最後まで有難うございます。

医療関係が少々はいつています。誤字・脱字・訂正箇所などありま
したらお教えください。
よろしく願います。

第4羽 コトリのオトモダチ(前書き)

医療関係が少々はいつています。誤字・脱字・訂正箇所などありません。ありがとうございました。

第4羽 コトリのオトモダチ

西海は同居人・幸野ゆきのことりが大丈夫か、不安に思えてきた。

今、西海は医局長室で自分の仕事を片付けている。自分がこの医局の長であるだけに仕事は山のようにある。

仕事中にぼんやりと思ったのだ。

朝食が作れたのだから、ある程度の家事はこなせるだろうが…退屈ではないだろうか？

西海の家に彼女の興味を誘うなものなど、ありそうもない。

それに彼女は少々一般常識が欠けているようだ。外出したとなったら大変だと思う。

「はあ。今日は出勤しない方が良かったかもしれない…」

西海は頭を抱え込んだ。

しかし、後悔先に立たず。今は目の前の仕事を片付けて、今日は早く帰宅しようと思った。

そしてパソコンに向き合ったのだが…

ノックする音が聞こえてきた。

西海は「はあ。」と溜め息をついた。それから「どうぞ。」と入室を促した。

すると「失礼します。」と、返事をしてきた。

西海はパソコンの画面を見続けていたが、顔を上げ、入室者を確認することにした。

入室してきたのは…

「おはよいございます、西海先生。」

神経（心療）内科医局・副局長南夜望みなよのぞみです、「ご無沙汰しています。」

「思いがけない人物だった。」

「ああ…南夜先生みなよでしたか…こちらこそご無沙汰しています。」

今日は外科医局に何か御用でもおありですか？急ぎでしたら、ど

うぞおしやってください。」

南夜は女性にしては少々背が高いが、物腰が非常に柔らかく、いつも笑顔を絶やさない。

心療内科では、1番評判の良い医師である。そのため各医局員などとは交流が深いらしい。

特に一般外科や救命救急センターは。

南夜は西海に「急ぎではないんです。」そう言うてから

「実は昨日、東宮先生から西海先生が記憶喪失の患者を引き取ったと伺ったので…」

西海は内心で舌打ちをした。

東宮の妙はお節介に若干腹が立っているらしい。

西海は表面上で冷静を保ちながら

「ええ。17歳の少女なんです。昨日、私がセンターへ搬送要請をしました。」

しかしセンターは満床。一般外科の病棟には長期間置けません。なので、私が引き取りました。」

南夜は省略してあるぶんも理解したのか、納得したように頷く。

「そうでしたか。わかりました。」

「東宮先生から何か言いつけられたのですか？」

うっかりボロを零した。南夜はそんな西海に苦笑した。…というよりは同情だ。

しかし南夜も西海の気持ちを理解している。センターで彼女もこき使われているのだから。

だいたい彼女はモンスターペイシエント（医療現場でモラルに欠けた行動をとる患者やその家族）の対応を一任されるのだ。

しかも、いちいち院内PHSを使って、尚且つセンター長である東宮がかけてくるので、拒否権すら与えられないのだ。

しかし、南夜は文句1つ漏らさない。彼女の人徳なのだろう。そんなことを考えていると…

「実は東宮先生からその患者さんのカウンセラーをしろ、と言われ

まして…

17歳の少女には、さすがに年上の男性に話せない悩みや不満があるだろう。と言う東宮先生の要請です。」

西海は今回ばかりは東宮に感謝した。

いつも意外と周囲の状況を見ていないようで見ているのだ。東宮哉とうきゅうか弥なやという人物は。

「有難う御座います。確かに、そういうのはあるでしょうね。

いや、助かります。あ、しかし、いつカウンセラーするんですか？」

南夜は心配には及ばない。と言う感じでふわりと笑みを浮かべて

「患者さ…幸野ゆきのことりさんが、必要なときや、私が不定期に西海先生のお宅に伺おうかと思っています。」

「そうですね。それが良いと思います、私も。宜しくお願いします。」

南夜は「では、今から行っても構いませんか？」と西海に聞いてきた。

「え、ええ。構いません。あ、しかし、彼女にちゃんと説明をして、彼女がちゃんと納得した上でお願いします。」

南夜は心得た、という顔で頷いた。

そして「それでは、失礼します。」と、西海の医局長室を退室した。

ことりは小高い丘にある西海の家で寛いでいた。

そして、海が見えるイングリッシュ・ガーデンに設けられている木で作られている丸テーブルとセットの椅子に腰掛けた。

沿岸には高速道路が見えるが、ことりの視界には入っていない。

彼女の視界一杯に広がるの美しい碧色をした海。それとは対照の白い砂浜だった。

「綺麗。」

自然と口から零れたのはたった一語。それ以外で表現はできない。とても平凡な一語だが、彼女が込めた感情こころはそれ以上の意味をもっている。

潮風が彼女の少し明るめのマロンブラウンの髪を攫っていく。

そんな穏やかな時間は玄関のチャイムによって終わりを告げられた。

「誰だろう…。勝手に出ていいのかな？」

ことりは少々葛藤したが、またチャイムが2、3回鳴るので玄関までいった。

そして、玄関までやってきたが、やはり躊躇した。

すると、「幸野ゆきのことりさんはいらっしゃいますか？」と尋ねる女性の声が聞こえた。

ことりは何故女性がここに住んでいること知っているのか、疑問だったが、とりあえず玄関を開けた。

「はい。私が幸野ことりですが…」

玄関には背が高く、黒髪のストレートショートの優しそうな女性がいた。

「初めまして、私は南夜望です。あなたが先日運ばれた病院の心療内科医です。

今日はあなたに用事があったてきました。もしお時間よろしければあがっても構いませんか？」

ことりはコックリ頷いた。それが南夜にも伝わったらしく、「では、失礼します。」と言って、

玄関に入って、靴を脱いでことりの後に続いてリビングに入った。

ことりはキッチンに向かい紅茶を入れてきた。

そして2人用のソファに腰掛けている南夜の前のテーブルに置き、自分是对面するように南夜の向かいの1人用のそれに腰掛ける。ことりは「あの…御用は？」と尋ねれば…

南夜は「ええ。それじゃあお話しますね。」と柔らかく微笑んだ。

ことりもその笑顔に安心感を覚えたのか…緊張という糸が緩む。

「実はね…私、あなたの『お友達』になりたいの。」

ことりはきよとん、とした。南夜はそれに笑みを滲ませて続けた。
「私にはね。若い『お友達』がないの。

友達は全員同年代でねえ。でも、私はあなたのような友達も欲しいの。」

そう区切ってから眉尻を下げ、控えめに「駄目かしら?」と聞いてきた。

ことりは困ったように微笑んだ。

そして、紅茶を飲み考えて

「実はね…私、あなたの『お友達』になりたいの。」と言った。

南夜が最初にことりと向かい合って言った言葉をことりはそのまま返してきた。

南夜ははにかむように微笑み。ことりは頬を赤く染め恥ずかしそうに笑った。

今日から2人は『お友達』。

第4羽 コトリのオトモダチ（後書き）

最後まで有難うございます。

医療関係が少々はいつています。誤字・脱字・訂正箇所などありま
したらお教えください。
よろしく願います。

第5羽 コトりのサンポ（前書き）

久しぶりの更新で若干読みづらいつらいと思われる。申し訳ありません。それではお楽しみください。

第5羽 コトリのサンボ

南夜とことりはしばらく談笑してた。

『お友達』と互いに認め合った2人。

今のことに初めてできた『お友達』。

それは同年代ではない。存在いる世界とこは同じではない。

だが、ちゃんとした『お友達』。

お互いに嬉しかった。年も離れ、全くお互いを知らない、本来なら患者と医師。

こんな不思議でゆかいな出逢いは非日常的。

西海のときもそうだった。本来なら患者と医師。

それが東宮哉弥とうきゅうかなやの命令あいまれによって同居生活が始まった。今回もそれによるもの。

そして日が暮れ始めた。

ダイニングから見える水平線に燃える陽が沈みいくころ、反対から冷える月が昇り始めるころだった。

南夜はそれに気づいた。

「いけない。私、今日は当直だわ、病院に帰らないと。」

そう言っ**て**バックを引**っ**手繰る**よ**うに持ち、ジャケットも同様の扱**い**だ。

ことりも空の色に気づいて、南夜を追いかけ玄関まで急いだ。

南夜は靴を履きながら早口で言う、

「私、明日は当直明けでお休みなの。翌日も有給休日だから…」

どこかへ行かない？折角だし、明日か明後日に1日出掛けましょ
う？

っ**て**言**っ**ても、病院から呼び出しあ**っ**たらちよ**っ**と…悲惨になる
可能性あるけど…」

語尾を濁しながらいった。ことりは「はい。是非！」とすぐに笑顔
で返事をした。

南夜はそれに微笑み「そう。じゃあまた後で連絡するわ。それじゃあね、『ことり』ちゃん。」
ことりも微笑み言う「はい。お待ちしていますね、後で。それじゃあね、『望』^{のぞみ}さん。」
玄関は開き、音を立て閉まる。ことりに静かな虚無感を与える。
また1人に戻ってしまった。ことりはそのまま玄関に暫らく立ち尽くしていた。
ただ玄関の摩りガラスの先…そう『外』を。

ことりは靴を履いて、玄関の鍵を閉めて外へ出た。
潮風にあたりながら、沿岸を歩き、とうとう白い砂浜まで来てしまった。

ことりは靴と靴下を脱ぎ、手からぶら提げる様に持った。
それから静かに波の打ち際に沿って歩いていく。

日が暮れ、空には半月に近い細い月が白く青白い光を海面に反射させていた。

その神秘的な情景をことりはうつとりしながら眺めていた。

ことりは自分の記憶が無いことは別に何とも思わない。

しかし失くしたことに關して強く胸に引っ掛かるものがある。

それを解消したいが、彼女自身ではどうにもならない。

そんなモヤモヤを取り払いたくて、ことりは立ち止まった。

海面に映るその光をぼつと眺め、瞼をゆっくり、と閉じる。
大きく、深く、息を吸い、歌いはじめた。

海の月よ わたしに道標をください

空の碧よ わたしに還る場所をください

朝に人は還る 夕に人は来るきた

朝の陽よ わたしに還る場所あてをください
空の蒼よ わたしに道標をください

その歌声は遠くに透き通った月光のように澄んで響く。
虚空の中で孤独に押しつぶされまいと足掻く声のようでもあった。

この日からことりは夜に海へ散歩をするようになった。

第5羽 コトリのサンポ（後書き）

いかがでしたでしょうか？感想・誤字脱字などの間違い報告なども
お願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1568/>

コトリのウミ

2010年10月9日08時00分発行